

サンヴァラ系密教諸流派の生起次第

杉木 恒彦

1. はじめに

サンヴァラ (*saṃvara*) 系密教はいわゆる無上瑜伽階梯の母タントラ系の密教として、主に9世紀以降のインド密教界で広く流行した。

従来の諸研究により、その基本的性格や思想の展開の有り様の一端が明らかにされている。だがそれらの研究は、仏説とされ聖典たる地位を持つ経典(タントラ)を主材料としたものであった。サンヴァラ系密教はいくつかの流派に分かれて伝承されていたという事実を考える時⁽¹⁾、各流派の思想に着目した研究の意義があると思われる。その際に主材料となるのは、経典ではなく成就者により書かれた儀軌類である⁽²⁾。

サンヴァラ系密教の諸流派単位の研究は極めて初期の段階にある⁽³⁾。本稿ではこのアプローチの基礎作業の一環として、サンヴァラ系密教の諸流派の中でも主となるルーイー (Lūyīpāda) 流・ガンター (Ghaṇṭāpāda) 流・クリシュナ (Kṛṣṇācārya) 流を、今回は特に各流派の儀軌の中でも37尊曼荼羅⁽⁴⁾の生起次第(特に曼荼羅観想の箇所)を中心に扱い、それらの概観の後、その思想的展開を検討する。

生起次第は成就法 (*sādhana*) の中に説かれている⁽⁵⁾。14世紀のチベットの大学匠プトゥン (Buston Rin chen grub) に伝えられたサンヴァラ関係の相承系譜によれば、Sa skya 派系のルーイー流成就法は、<rDo rje ḥchan — Phyag na rdo rje — Sa ra ha — Klu sgrub — Sa wa ri pa Lū i pa (Lūyīpāda) — Dā ri ka pa (Dārikapāda) — rDo rje dril bu pa (Vajraghaṇṭāpāda) — Rus sbal shabs — Dsa la ndha ra⁽⁶⁾ — Nag po spyod pa (Kṛṣṇācārya) — . . . >⁽⁷⁾といったように、また、同派のガンター流成就法は、<bcom ldan ḥdas bDe mchog — rDo rje phag mo — rDo rje dril bu pa (Vajraghaṇṭāpāda) — Rus sbal shabs — Dsā la ndha ra pa — Nag po spyod pa (Kṛṣṇācārya) — . . . >⁽⁸⁾といったように伝承されており、ルーイー流の創始者であるルーイーの成就法は弟子のダーリカ (Dārikapāda) を経て、ガンター流の創始者であるガンターへ、更にクリシュナ流の創始者であるクリシュナへと伝わり、更にガンターの成就法はクリシュナへと伝わったことが理解できる。すなわち、ルーイーに後続するガンターは(後に明らかにするがダーリカによる再構築を経て伝承された)ルーイーの生起次第を踏まえて新たに生起次第を作成して創始者となり、更に後続するクリシュナはルーイーとガンターの生起次第を踏まえて新たに生起次第を作成して創始者となった可能性を現段階で提示することができる。

2. ルーイーとダーリカの生起次第

ルーイーの手による37尊成就法としては、*Cakrasaṃvaraśrītherukābhisamaya*（以下『現観』、成就法中唯一 Skt. Ms. が参照できる⁽⁹⁾）がある。これに対する注釈書として、*Dīpaṃkaraśrījñāna* による *Abhisamayavibhaṅga*（以下『現観分別』）、*Prajñāraṅgita* による *Śryābhisamayapañjikā*（以下『現観釈』）があり、また『現観』に基づいて作成されたルーイー流成就法としてプトゥンによる *dPal ḥkhor lo sdom paḥi sgrub thabs rnal ḥbyor bshi ldan*（以下『具四瑜伽』）がある。上掲二書は『現観』を四瑜伽（ヨーガ・アヌヨーガ・アティヨーガ・マハーヨーガ）の体系で説明するが、「マハーヨーガ」⁽¹⁰⁾の名称以外は『現観』に根拠がない。上記諸注釈等⁽¹¹⁾に関しては『現観』の受容の一形態として本稿では扱い、それらの記述は主として注記の中で述べる。

さて、『現観』全体の内容（私見）は以下のようになっている。なおその受容形態の一つとして特にプトゥンの『具四瑜伽』のシノプシスを並行して挙げよう。

『現観』	Ms	Toh	Ota	『具四瑜伽』	
				<生起次第> 加行・積集	
四無量の観想	1b1	186b4	215a4	前行	1b3-
蘊界處の浄化	*	-186b7	-215b1		- 4a2
結界	*	-187a3	-215b4	護輪	- 5a1
2種の積集	- 3a6	-187a5	-215b7	2種の積集	- 7a4
器界観	- 3b6	-187b1	-216a3	器界観	- 7a7
金剛サツタ相の				ヨーガ	- 7b4
HŪM字の観想	- 4a1	-187b2	-216a4	アヌヨーガ	- 8a1
				アティヨーガ	
外の37尊曼荼羅	- 8b2	-189b2	-218b1	外の37尊曼荼羅	-12b5
37菩提分法神瑜伽	- 9b5	-190a3	-219a3	37菩提分法神瑜伽	-13b1
内の24瑜伽女	-11a4	-190b4	-219b6	内の37尊曼荼羅	-15a7
刹那生起の真言	-11b1	-190b6	-219b7	刹那生起の真言	-15b5
2種の甲冑	-12a2	-191a2	-220a4	2種の甲冑	-16a7
智慧曼荼羅引入	-12a6	-191a4	-220a6	智慧曼荼羅引入	-16b3
供養・讃	-14a4	-191b5	-221a1	灌頂	-17b2
灌頂	-14a6	191b5	-221a2	供養・讃	-18b7
バリ (bali) 供養	-14b5	-191b7	-221a4		
内の24勇者	-15a5	-192a3	-221a8		
勇者成就	-15b4	-192b1	-221b6	勇者成就	-19b1
				<究竟次第>	
マハーヨーガ	-16a5	-192b4	-222a3	マハーヨーガ	-20a4
				念誦瑜伽	-20b5
				日々の実践・バリ供養	-24a5

行者自身と周囲の浄化⁽¹²⁾を経て結界した後、前面に観想した仏やグルに供養をし、続いて以上観想してきた諸々のものも含めて一切は清浄であり⁽¹³⁾、空であり、唯心 (*cittamātra*) であると理解し、その心もまた虚妄にすぎないと観想し、一切皆空に安らぐ⁽¹⁴⁾。この修習は、根源的な心が空を体験するいわゆる転依、すなわち深層意識のレベルにおける根源的な認識の転換の体験を目指すものであると予想され、これより以降、転依を体験した行者の根源的な心が出する諸現象は全て神性なものに他ならなくなる。

次に空の状態から起き上がって器世間を観想し、そこにあるスメール山の頂上にある8葉雑色蓮華の上にアーリ (母音) とカーリ (子音) を結合させ、その中心に、(本来形態を超えた法身である) 金剛サッタが形態をとったものである HŪṂ 字 (*hūṃkāravajrasattvarūpa*) を観想し⁽¹⁵⁾、そこから種々の光明が放たれる。密教ではアーリは女性、カーリは男性に、蓮華はしばしば法蔵としての母の子宮に例えられている。子宮としての蓮華にアーリ (女性) ・カーリ (男性) の結合を経て法身が HŪṂ として顕現し、光明を放つと考えられていた可能性がある⁽¹⁶⁾。

ここで、行者自身は四面十二臂のヘルカとなり、八尸林を伴い、五つの曼荼羅輪から成る37尊曼荼羅を生起する。そのうちの心語身3輪の24体の合体せる勇者 (*vīra*) と瑜伽女 (*yoginī*) が坐する24の輻輪には、サンヴァラの行者が瑜伽女と性瑜伽を行う24巡礼地の名が付されている⁽¹⁷⁾。これはマクロコスモスとしての「外のピータ (*pīṭha*) など」の象徴的代替物であり、本稿では「外の曼荼羅」と呼ぶことにする。

次に、それら37尊を37菩提分法として思念する「37菩提分法としての神の瑜伽 (*saptatrimśadbodhipākṣikadharmadevatāyoga*)」⁽¹⁸⁾を行う。この修習の目的は、観想された神々を菩薩の諸実践に結び付けることにより相対化し、神々の実体視を避けることにあると考えられる⁽¹⁹⁾。

これに続いて「内のピータなど」であるミクロコスモスの象徴的代替物としての身体曼荼羅 (*kāyamaṇḍala*) (本稿ではこれを便宜上「外の曼荼羅」に対する「内の曼荼羅」と呼ぶことがある) の観想が行われる。それは「PŪ, JĀ, …」などインドに実在した24巡礼地の頭文字を24の身体部位 (=「内のピータなど」：主要な24本の脈官たる24人の瑜伽女が依止する箇所である、準主要な脈官が網の目のように集まっている24箇所) に布置することによって観想される。従ってこの「内の曼荼羅」は合計24尊から成る⁽²⁰⁾。そして、ここで初めて「ピータなど」と十地の対応が述べられる。先の「外の曼荼羅」でも巡礼地の名称は登場したが、その際には24巡礼地を十に総括するピータ・ウパピータ…の名称は登場せず、十地との対応は述べられなかった。つまり、この「内の曼荼羅」の観想によって行者の生来の身体が十地を円満していること、それに対応する形で先の「外の曼荼羅」もまた十地を完備していたことがここで初めて行者に理解される。すなわち、ルーイーにとってはこの「内の曼荼羅」たる身体曼荼羅が生起次第の重点なのである。

ところで「内の曼荼羅」の観想に関する『現観』の記述を見ると、「内の24瑜伽女」と「内の24勇者」の対応がなされておらず、それらは別々に説かれている (→私見表を参照せよ)。つまり、この観想では「内のピータなど」としての身体部位に観想されるのは「内の24瑜伽女」のみであり、(「外の曼荼羅」を見る限り) 彼女たちと合体しているべき「内の24勇者」は合体尊として「内のピータなど」に同時に観想されずに身体の各成分 (*dhātu*) として観想されていた可能性がある。これは何らかの理由による単なる記述順序の混乱であり実際は合体尊として観想されていたのかもしれないが⁽²¹⁾、もし『現観』の意図が上述のようなならば、これは、「内の24勇者」である身体の

各成分が、「内の24瑜伽女」である24脈官がつながる先であったりその中を流れるものであったりするために、その24脈官が依止する「内のピータなど」がある身体部位とはもともと一致しているわけではないという事実を反映しているのではないと思われる。

続いて、「刹那生起の真言」(本稿では仮にこのように呼ぶ)が説かれる⁽²²⁾。以上の観想は、外・内の曼荼羅を徐々に明確に観想するものだったが、今、このマントラによって外・内の曼荼羅を瞬時に生起することが試みられる。

次に勇者には勇者の甲冑を、瑜伽女には瑜伽女の甲冑を着せる「2種の甲冑⁽²³⁾」の修習を行う。

以上によって三昧耶輪 (*samayacakra* ; これは五輪の一番外側の「三昧耶輪」とは違い、通常生起次第で「三昧耶サッタ」「三昧耶曼荼羅」と呼ばれるものと同義である) が完成する。

その後、十方世界に遍満する勇者と瑜伽女の集会である智慧輪 (*jñānacakra*) を引き寄せて、三昧耶曼荼羅としての行者と一体化させる。これによって一切平等の智慧を獲得するのだと予想される。その後、サンヴァラ曼荼羅＝自分自身を供養し歓喜し⁽²⁴⁾、続いて灌頂の神々を呼び出して灌頂を受けるが、これによって行者自身は三界の王たる仏の証しを得たことになるのだと思われる。

その後、普遍性を獲得したサンヴァラ曼荼羅＝自分自身を供養し歓喜し、続いて灌頂の神々を呼び出して灌頂を受けるが、これによって行者自身は三界の王たる仏の証しを得たことになるのだと思われる⁽²⁵⁾。

なお、続く「勇者成就」(と本稿では仮に呼んだもの) とは、勇者の根本マントラなどを梵紐、24勇者を身体成分、6勇者の甲冑のマントラから(六波羅蜜多に対応する)六つの象徴物、ヴァーラーヒーのマントラ⁽²⁶⁾を首飾り、神々⁽²⁷⁾のフリダヤマントラ (*hr̥dayamantra*) を(カパーラの)鬘、7字のマントラ⁽²⁸⁾を耳飾り、ヴァーラーヒーのウパフリダヤマントラ (*upahr̥dayamantra*)⁽²⁹⁾ を(象の)皮、6瑜伽女の甲冑のマントラを腰帯、瑜伽女たちのマントラを(手に持つ)カパーラ、ヴァーラーヒーのフリダヤマントラ⁽³⁰⁾をカパーラの冠として観想することである。これはすなわち、自身をヘールカの姿のサンヴァラ密教の勇者として改めて自覚する観法だと考えられる。

続く「マハーヨーガ」は『現観分別』『具四瑜伽』によれば究竟次第に関する観法である。これについてはサンヴァラ系密教の究竟次第を扱う別稿で採りあげる予定である。

次に、ルーイー流の後継者であるゲーリカ著の *Śrīcakrasaṃvarasādhana-tattvasaṃgraha* (以下『D:成就法』)の曼荼羅観想法を概観する。まず初めに全体の内容(私見)を挙げよう。

『D：成就法』	Toh	Ota
自守護 (<i>bdag bsrün ba</i>)	197b6-	222b3-
	-198a5	-223a4
結界	-198b2	-223b2
2種の積集	-199a2	-224a3
器界観	-199a4	-224a6
金剛サッタ相の HŪM 字の観想	-199a5	-224a8
応身：外の13尊曼荼羅	-200b1	-225b7
報身：内の器世間・楼閣と内の37尊曼荼羅	-201a7	-227a2
刹那生起の真言	-201b2	-227a4
智慧輪引入	-201b4	-227a7
2種の甲冑	-201b6	-227b3
灌頂	-202a1	-227b6
供養	-202a2	-227b7
法身：37菩提分法神瑜伽	-202b3	-228b1
マハーヨーガ	-202b6	-228b5
念誦瑜伽	-203a4	-229a4
バリ供養	-203b3	-229b4

サンヴァラ曼荼羅観想の前と後に行われる修習に関しては、『現観』とそう大差はない。だが、生起次第の中心となる曼荼羅観想法に関しては、ダーリカの独自性が見られる。

『現観』同様、転依の体験の後に、器世間を生起し、そのスメール山頂に蓮華と法身相の HŪM 字を生じた後、そこから「外の曼荼羅」を生起する。『現観』と違い、ここで生起される「外の曼荼羅」は13尊である。ダーリカはこれを「応身」に結び付ける。

次に、行者の身体中に先の器世間と対応する「内の器世間・楼閣」と呼ぶべきものを観想する。すなわち、足を風輪, *trikaṭi* を火輪, 胃を水輪, 心臓を地輪, 背骨をスメール山, 身体の8支分を8本の柱, 身体を四角い楼閣であると観想する。これは『現観』には説かれていない。続いて、行者の身体は始めから十地を円満していることを理解するために身体曼荼羅たる「内の曼荼羅」を生起する。

ヘールカなどの神は脈官の姿となって安住している。⁽³¹⁾

とするように、本書の「内の曼荼羅」は『現観』とは違い、24尊ではなく37尊である。13尊に関して、

(「内の器世間・楼閣」「内の24尊」の説明に続いて) 臍あるいは心臓の4本の脈官を(四)元素(を運ぶ)風 (*rluṅ* ; *māruta* ?⁽³²⁾) と五甘露⁽³³⁾が降下する。九つの大楽の自性を思念すべきである。8本の手 (*phyag brgyad* 8本の脈官のことか?) あるいは八つの門には、業の風 (*las kyi rluṅ* ; *karmamāruta* ?) ⁽³⁴⁾あるいは動作主となってカーカーサーとヤマなど

の8人がある。⁽³⁵⁾

と説かれている。ここでは三昧耶輪の8人の瑜伽女は身体の八つの穴につながる脈官と結び付けられ、大楽輪の4人の瑜伽女は臍あるいは心臓を通る4本の脈官とされていると予想される。ヘールカとヴァーラーヒーについては明示せず、ただ先の「脈官の姿となって安住している」に含めるのみである。またここで身体部位に観想される勇者と瑜伽女は「内のピータなど」において合体している⁽³⁶⁾。そしてダーリカはこれを「報身」に結び付ける。以上によって三昧耶(輪) (*dam tshig*) が完成する。

続いて智慧輪引入⁽³⁷⁾により一切平等の智慧を獲得し、2種の甲冑の修習を経て、灌頂によって仏の証しを得て、供養により歓喜する。

その後、「37菩提分法としての神の瑜伽」を修習し、神々を仏菩薩の諸実践に結び付けることにより相対化する。これをダーリカは「法身」に結び付ける⁽³⁸⁾。

以上の『D：成就法』の曼荼羅観想法の特徴は以下の二点にまとめられる。

第一点として、「内の37尊曼荼羅」の基本構想とその重視の傾向が挙げられる。

サンヴァラ曼荼羅は原初形態としては13尊であった。その13尊は身体内に観想されるものではないという点で「外の曼荼羅」的であった。*Vajraḍākatantra* に到ると、その13尊とはもともと理論上密接であったわけではない「外の24ピータなど」と「内の24ピータなど」に勇者・瑜伽女という象徴的代替物を当てることにより、「外・内の24尊」が構想された⁽³⁹⁾。それら24尊が先の13尊と統合され、「外の37尊曼荼羅」の構想が完成した。だがこの段階においても、その原初の13尊の「内の曼荼羅」化は放置されたままであり、身体曼荼羅は「内の24尊曼荼羅」とされ、「外」「内」の対応はその24尊のみとされた。ルーイーは(既に述べたように「内の曼荼羅」の神々を合体尊としなかった可能性があるが) この段階の理論の中で生起次第を作成したと考えられる。

だが、ダーリカは上述の13本の脈官の構想をかけたことにより、それらを原初の13尊に当てはめた。そして、脈官としての瑜伽女と成分 (*kṛmāṣ, dhātu*) としての勇者を「内のピータなど」において合体させ、更に、身体全体をそれら神々が依存する容器としての「内の器世間・楼閣」に見立てた。これら三つの操作によりダーリカは「内の37尊曼荼羅」の基本構想を完成させる。ここにおいて、サンヴァラ曼荼羅は「外の37尊曼荼羅」と「内の37尊曼荼羅」という形態を完備した。この「内の37尊曼荼羅」の基本構想はダーリカ以降、ガンターやクリシュナに継承されるのみならず、『現観分別』『現観釈』『具四瑜伽』といった著作が『現観』を再構築する際にも影響を与えていると考えられる⁽⁴⁰⁾。

だが、ダーリカは生起次第では「外の曼荼羅」を原初の13尊のみとし、インド各地に実在した24巡礼地に関する「外の24尊」を観想しない。それら24尊は「内の曼荼羅」の中でのみ観想される。すなわち重点があるのは「内の曼荼羅」たる身体曼荼羅なのである。この傾向は(後に論ずるが) ガンターにおいてより一層徹底される。

第二点として、『D：成就法』は「外の13尊曼荼羅」を応身、「内の37尊身体曼荼羅」を報身、「37菩提分法神瑜伽」(および「マハーヨーガ」)を法身に結び付け、それらの観想を三身瑜伽としている点が挙げられる。三身を獲得していることが仏の特徴であるという事情を踏まえたものだと考えられる⁽⁴¹⁾。

以上の2点の独自性に関して、『D：成就法』は「三身瑜伽によって安住した結果かの勇者（＝ヘールカ）の功徳を獲得するということは、無数劫の間、無数の（師）の口によって説かれ得なかった」と述べており、この独自性の創始者としての自覚を示す⁽⁴²⁾。

3. ガンターの生起次第

ガンター著の成就法としては *Śricakrasaṃvarasādhana*（以下『Gh：成就法』）がある。本稿ではこれの内容全体のリスト（私見）を提示して主材料とするが、時にもう一つのガンター著成就法として *Upadeśakāyamaṇḍalābhisamaya* を参照しつつ、特に曼荼羅観想の箇所を中心に概観する。更にガンター流成就法の受容の一形態として、プトゥン著の *dPal ḥkhor lo sdom paḥi lus kyi dkyil ḥkhor gyi mñon par rtogs pa*（以下『身体曼荼羅現観』）を挙げる。だがこれは全体の構成を項目名を付して体系立てて述べていないので、『Gh：成就法』の各項目に内容的に相当する箇所の指摘のみを表中に挙げる。

『Gh：成就法』	Toh	Ota	『身体曼荼羅現観』
自浄化など	222b6- -222b7	258a7- -258a8	1b3- -2b4
福德の積集	223a1	-258b1	-3b6
内の器界観	223a1	258b1	-4a6
外の1尊曼荼羅	-223a5	-258b7	-5a6
内の37尊曼荼羅	-224a1	-259b4	-7b1
37菩提分法神瑜伽	224a1	259b4	-7b3
2種の甲冑	-224a3	-259b6	8a1- -8a6
智慧（輪）引入	224a3	-259b7	-8b3
灌頂	-224a4	259b7	-9a3
供養	-224a5	-260a1	-10b1
念誦瑜伽	224a5	260a1	-11a4
日々の実践・バリ供養	-224b1	-260a5	-15a2
<究竟次第>	224b1	-260a6	-15a5

『Gh：成就法』は『D：成就法』の独自性を継承しつつも、「内の曼荼羅」への重視をより徹底し、身体外に関する観想の所作を多く省く傾向が見られる。

自身の浄化を観想した後に、十方の神々とグルを前面に観想し、供養した後に、彼らを行者の眉間の毫から身体に入れる。続いて、通常の器界観を行わずに、『D：成就法』で既に明示された「内の器界観」を行う。これにより行者の身体は器世間となる。その後、行者自身は四面十二臂のヘールカとなり、妃ヴァーラーヒーと合体する。『Gh：成就法』で観想される「外の曼荼羅」はこの1尊のみである。続いて『D：成就法』同様、ヘールカとなった自分の身体に「内の37尊曼荼羅」を観想し、行者の生来の身体はそのまま十地円満していることを理解する。続いて、それら37尊に対応する形で「37菩提分法としての神の瑜伽」を修習することにより神々を仏菩薩の諸実践に

結び付けて相対化する⁽⁴³⁾。その後、勇者と瑜伽女の2種の甲冑をまとい、自分の身体に実現した(三昧耶輪としての⁽⁴⁴⁾)サンヴァラ曼荼羅に智慧(輪) (ye ses) を引き入れて一切平等の智慧を獲得する。続いて灌頂の神々から灌頂を受けて仏の証しを獲得し、自身への供養によって歓喜する。

器界観を「内の器界観」しか行わないことや、「外の1尊曼荼羅」と「内の37尊曼荼羅」という構想から理解できるように、身体外に関する観想を多く省略するガンターの「内の曼荼羅」への重視は徹底している。そのような立場からすれば、「外の曼荼羅」は「内の曼荼羅」を実現しているヘールカ(およびその妃ヴァーラーヒー)のみ観想すればよいのである。

ところで、『D:成就法』で登場した「内の37尊曼荼羅」の構想は、ガンターの著作でその詳細がより一層明かされる。13尊に関する記述を挙げれば、『Gh:成就法』には

胸にあるアヴァドゥーティーと HŪṂ が不壊なる内の自性である。ダーキニー・ラーマー・カンダローハー・ルーピニーの4人も(ヘールカの各方位の)顔の色と同じであり、カトヴァーンガと鉢⁽⁴⁵⁾と包丁を持ち、五つの象徴物で飾られている。4供養の自性としての脈官は四維(に)ある。(以上が)大楽輪であり、(4人の女神たちの種字は) MAM LAM PAM TAM である。八つの HŪṂ も三昧耶(輪の8人の女神たち)であると同時に言われている。⁽⁴⁶⁾

と説かれ、また *Upadeśakāyamaṇḍalābhisamaya* には

ダルマチャクラには明瞭な色をした4葉がある。HŪṂ から臍に(向かって)方便と般若の自性を観想するべし。方角に即した葉(に)族の種字から心髄の4人の瑜伽女を生じるべし。…(24勇者瑜伽女についての記述がある)…ダルマチャクラにおける外側の8葉に長い HŪṂ から8人の忿怒女を(生じるべし)。⁽⁴⁷⁾

と説かれている。すなわち、ヘールカは心臓における HŪṂ という成分、ヴァーラーヒーはアヴァドゥーティー、大楽輪の4瑜伽女は心臓のダルマチャクラの四方の葉に依止する4本の脈官でそれらの種字は MAM LAM PAM TAM⁽⁴⁸⁾、三昧耶輪の8瑜伽女は心臓のダルマチャクラの四方四維の8葉に依止する脈官でそれらの種字は全て HŪṂ であるという詳細が明かされている。

4. クリシュナの生起次第

クリシュナ著の成就法 *Śrīcakrasaṃ varasādhana* (以下『K:成就法』)の内容全体(私見)は以下のようになっている。なお受容の一形態としてプトゥン著 *dPal ḥkhor lo sdom paḥi sgrub thabs kyi ḥgrel pa spoṅ bar byed pa* (以下『K:成就法註』)のシノプシス(編集の都合上項目名は簡略化した)を並行して挙げる。

『K：成就法』	Toh	Ota	『K：成就法註』	
初瑜伽三摩地 (なし)	272b4-	322b3-	<生起次第> 初加行三摩地	5b5-
2種の積集	-272b6	-322b4	前行	-8b3
結界	-272b7	322b4	2種の積集	-12a1
器界観・道場観	-273a1	-322b6	根本(<i>dñōs gshi</i>)の生起	
持金剛の観想			護輪	-15b3
四面四臂四足の持金剛	-273a5	-323a3	器界観	-24b2
ヘールカ			持金剛の観想	
セーヴァー	-273b3	-323b2	因の持金剛	-33b6
ウパサーダナ	-273b6	-323b4	果の持金剛	
サーダナ	-273b7	-323b6	セーヴァー	-40b3
智慧サッタ引入	-274a1	-323b7	ウパサーダナ	-44a4
灌頂	274a1	323b7	サーダナ	-45a6
供養	-274a2	-323b8	マハーサーダナ	
外・内の37尊曼荼羅	-275b2	-325b3	智慧曼荼羅引入	-46a3
(なし)			灌頂	-47b1
(なし)			供養	-49b1
智慧曼荼羅引入	-275b3	-325b4	最勝曼荼羅王三摩地	49b6-
灌頂	275b3	325b4	セーヴァー	-67b1
供養	275b3	325b4	ウパサーダナ	67b1
37菩提分法神瑜伽	-275b4	-325b6	サーダナ	-67b2
(なし)			マハーサーダナ	
脈官輪の教示など	-276b1	-326b2	智慧曼荼羅引入	67b3
神々とバリ供養			灌頂	-68a3
などのマントラ	-276b7	-327a2	供養	-69b1
			37菩提分法神瑜伽	-70a7
			最勝羯磨王三摩地	-70b1
			<究竟次第>	-75a2
			念誦瑜伽	-76b4
			日々の実践・バリ供養	-100a7

『K：成就法』の生起次第は三三摩地（初瑜伽・最勝曼荼羅王・最勝羯磨王三摩地）から成り、特に初瑜伽三摩地は主に四支（セーヴァー・ウパサーダナ・サーダナ・マハーサーダナ）から成ると予想される。確かにその本文中には最勝曼荼羅王三摩地以下、およびマハーサーダナの名称は記されていないが、クリシュナの別の著 *Ālicatuṣṭaya* には三三摩地と四支の全ての名称が列挙されている⁽⁴⁹⁾ので、彼がそれらの名称を知らなかったわけではない⁽⁵⁰⁾。

さて、『K：成就法』の曼荼羅観想法を概観しよう。行者は転依を体験した後に⁽⁵¹⁾結界、続いて器世間と楼閣を生起した後⁽⁵²⁾、その中に四面四臂四足の白色の持金剛（『K：成就法註』はこれを「原因としての持金剛」とする）と彼の白色の妃⁽⁵³⁾を生起し、彼らが性瑜伽を行うのを観想する⁽⁵⁴⁾。

なお、持金剛の四臂四足という姿は、それが五鉷金剛杵の形をそのまま神格化したと考えれば理解できる。以上が白色の四面四臂四足の持金剛とその妃の生起である。

次に、十方から一切仏を摂し⁽⁵⁵⁾、彼らを四面四臂四足の持金剛の中に引入し⁽⁵⁶⁾、精液と共に、その持金剛の男根から妃の子宮の中に放出する。これは、*Samvarodayatantra* にも説かれている、中有としての存在が父母の性交を見て口の中に入り、更に子宮の中に入って受胎が始まるという過程⁽⁵⁷⁾を思い起こさせる。それにより子宮の中にと HŪM と AM⁽⁵⁸⁾ が生じ、それらから四面十二臂のヘールカ（『K：成就法註』はこれを「結果としての持金剛」とする）とその妃である一面二臂のヴァーラーヒーが生じる。彼らは、以上の観想の過程からも明らかなように、十方の一切仏の生まれ変わりである。その後、左回りで四面加持のマントラを唱えた後、清浄なる法界の自性を自体とするという傲慢さを持つ⁽⁵⁹⁾。以上が「セーヴァー」である。

次に、勇者と瑜伽女の2種の甲冑をヘールカとヴァーラーヒーがまとう。以上が「ウパサーダナ」である。

次に、ヘールカの心臓に心金剛としての HŪM、喉に語金剛としてのヘールカのウパフリダヤマントラ (*ñe baḥi sñiṇ po*)⁽⁶⁰⁾、額に身金剛としてヘールカのフリダヤマントラ (*sñiṇ po*)⁽⁶¹⁾を布置する⁽⁶²⁾。続いてヴァーラーヒーの心臓にヴァーラーヒーのフリダヤマントラ⁽⁶³⁾を、喉に om cauṛi hūm hūm phaṭ を、額にヴァーラーヒーのウパフリダヤマントラ⁽⁶⁴⁾を布置する⁽⁶⁵⁾。続いてヴァーラーヒーの頭・心臓・(蓮華の) 薬・腰・太股にそれぞれ OM・HŪM・ĀḤ・SVĀ・HĀ を布置する⁽⁶⁶⁾。以上の三密と五族による2種の加持が「サーダナ」である。

次に、以上で完成した三昧耶（サッタ）(*dam tshig*) としてのヘールカとヴァーラーヒーに智（サッタ）(*ye śeś*) を引入させる。『K：成就法註』に従うならば、これに先立ってヘールカとヴァーラーヒーは子宮から出生するという。続いて灌頂の神々により灌頂を受けて成仏の証しを得てから、供養によって歓喜する。『K：成就法註』によれば、以上が「マハーサーダナ」であるという。

以上の全てを以って、「初瑜伽三摩地」が完成する。それはすなわち、(ヴァーラーヒーを伴う)「外のヘールカ」の生起の完成であると考えられる⁽⁶⁷⁾。

次に、心臓の HŪM から光明を放ち、十方の善逝たちを眉間から入れてマハースッカチャクラの HAM に置き、ヴァーラーヒーとの性瑜伽によって智慧の火を燃え上がらせ、HAM が溶けたものである勇者と瑜伽女の種字の輪をアヴァドゥーティーを通して降下させて、男根を経てヴァーラーヒーの子宮の中に放出する。その子宮の中で四門を備えた楼閣と37尊曼荼羅を観想する⁽⁶⁸⁾。

続いてそれを子宮から出生させ、「外の37尊曼荼羅」と「内の37尊曼荼羅」⁽⁶¹⁾を同時に観想する。これは、「外の曼荼羅」を観想してから「内の曼荼羅」を観想するといったように二段階で観想することを規定するルーイーなどとは方法が異なっている。

なお、この『K：成就法』では13尊の脈官について、

蓮華の四方に即した4葉に依止するものは四元素の脈官であり、燈火の如き自性である。(四) 維に依止する時、その内部にあるかの4（本の脈官）から五甘露が降下する。それは無自性のあり方に従っている。これに関して供養のあり方によるならば、供養の如くに語られている。身体の心臓内に八つの脈官が依止している。他にも身語心の区別によって24（の脈官）

があると言われる。(それらは)ピータなどの区別によって全てのピータに依止している。清浄なパートナーたちやカーカスヤーなど(の三昧耶輪の8 瑜伽女)が順々に(それらの脈官に相当する)。と、世尊持金剛が広説したので(ここで)語られる。⁽⁶⁹⁾

と述べられている。すなわち、三昧耶輪の8 瑜伽女の脈官が依止するのは心臓であり、「パートナーたち」の脈官が依止するのは(いずれかの)蓮華の4 葉であるとされている。上記の「パートナーたち」とはダーキニー・ラーマー等と同様に四元素の瑜伽女たちであり、やはり37脈官について述べるクリシュナ著 *Vasantatilaka* では

4 葉は四方に即している。四元素に関する(四つの)脈官は、心金剛の住居に依止している。(それらは)ダーキニーとラーマーとカンダローハーとルーピニーである。⁽⁷⁰⁾

といったように、「パートナーたち」はダーキニーなどの大楽輪の4 瑜伽女に言い直されている。ヘルカとヴァーラーヒーに関しては、『K：成就法』Toh. 275b4-276a4./ Ota. 325b6-326a7. とほぼ同一の文章を掲載する *Vasantatilaka* の Ms. によれば、

心臓 (*hṛd*) の中にある蓮華は、8 葉で苞を持つ。その中にある脈官 (*nāḍī*) は、燃え上がる火をその性質としている。(その脈官は)芭蕉樹の華のように、垂れ下がって下を向いている。その (*tasya* :これは *nāḍī* (*f*) ではなく *hṛd* (*n*) を指す) 中にいる勇者は、粗大な (*sthūla*) 芥子粒ほどのものであり、不滅の種字 HŪM 字であり、滴っている露のようである。(その HŪM は) 身体を持つ者たちの心臓における歓喜であり、「ヴァサンタ」(*vasanta*) とされる。ヴァーラーヒーの「ティラカ (*tilakā*)」は、海中の火の姿である (*vaḍabānalarūpā*) とされる。「ティラカ」は) 業の風 (*karmamāruta*) により勧請されて、臍の曼荼羅で燃え上がっている。……(先に引用した大楽輪の4 瑜伽女の4 本の脈官について等が述べられる)……。といったように、身体の中にある心臓の中には5 本の脈官が依止している。⁽⁷¹⁾

と述べられている。すなわち、4 瑜伽女の脈官が依止する箇所は心臓であり、そして(決して明確に記されているわけではないが)ヘルカは心臓における HŪM、ヴァーラーヒーはアヴァドゥーティーであると予想される。

まとめれば、クリシュナはグルマチャクラの四方の葉に依止する4 本の脈官を大楽輪の4 瑜伽女、グルマチャクラの8 葉に依止する8 本の脈官を三昧耶輪の8 瑜伽女とし、ヘルカとヴァーラーヒーに関しては HŪM とアヴァドゥーティーとしてしていると予想される。以上の如き明示されている部分に関してはガンターと同意見である。だが『K：成就法』ではそれら13尊の種字は明示されない⁽⁷²⁾。

以上で三昧耶(輪) (*dam tshig*) が完成する。

続いて智慧(輪) (*ye ses*) 引入によって一切平等の智慧を獲得し、灌頂により仏の証しを得、供養によって歓喜する。その後「37菩提分法としての神との瑜伽」を行う⁽⁷³⁾。

『K：成就法』の生起次第の特徴は大きく以下の点にまとめられる。

『K：成就法』は、「三三摩地」や「四支」の構成および（ルーイーなどでは未だ潜在的だった）＜父母の性交→受胎→出生＞の明確な図式⁽⁷⁴⁾といった意味付けを生起次第の構成に当てた。そして「内の37尊曼荼羅」の構想を継承すると共に、更に（ガンターによって軽視が徹底された）「外の37尊曼荼羅」を復活させた。『Gh：成就法』では「外の1尊」を観想した後に、その身体中に「内の37尊曼荼羅」を観想した。『K：成就法』では、「外の1尊」の観想を初瑜伽三摩地とし、その後、その「外の1尊」を主とする「外の37尊曼荼羅」と、その「外の1尊」の身体中に「内の37尊曼荼羅」を同時に観想することにより、生起次第において「外・内37尊」対応を完成した。それはすなわち、ルーイー以降の生起次第の諸構成要素に明確な意味を付与してその構造の細分化・整理を目指すと共に⁽⁷⁵⁾、ガンターによる徹底した「内の曼荼羅」主義に対して、「外（マクロコスモス）」「内（ミクロコスモス）」の対応に再着目した再構築の試みであったと考えられる。これに関して、クリシュナは *Vasantatilaka* の中で、

人造の曼荼羅は捨てられた。人造の護摩儀礼と、人造の観想を行うことと、人造の念誦といった、（それら）全ての人造物と言われるものなどは、自性瑜伽 (*svabhāvayoga*) の性質より（捨てられた）。人造物なるものは、「外」的な擬似物 (*pratīmā*) である。⁽⁷⁶⁾
自分の身体に *buddhatva* は安住している。（身体の）他にはどこにもない。⁽⁷⁷⁾

と主張してやはりガンター同様に身体に即した「内の曼荼羅」を重視すると同時に

吉祥なるチャクラサンヴァラの次第から、「外」を伴う「内」の姿によって (*Sabāhyādhyātmarūpeṇa*)、瑜伽の座より出現せるヴァサンタティラカを私は説こう。⁽⁷⁸⁾

といったように（＜「外」を伴う「内」＞という表現は本書で繰り返し用いられている）、「外・内」の対応を強調する。つまり、クリシュナにとって「内」との結び付きが理解されない「外」が捨てられるべきものであるのに対し、「内」との対応が理解される「外」は「外・内」の対応という観点から維持され则认为られる。

なお、この『K：成就法』は Kalākapāda 著の成就法 *Srīvajraḍākanāmamahātāntrarājodhṛtaśādhānopāyikābodhicittāvalokamālā* の成立に大きな影響を与えていると考えられる。この成就法はその名の通り、*Vajraḍākatantra* から略出された成就法であり、曼荼羅も *Vajraḍākatantra* のそれだが、その内容は上述の諸特徴を持つ『K：成就法』に明らかに基づいている。本書もまた三三摩地を基本構成とし、＜父母の性交→受胎・妊娠→出生＞の過程で曼荼羅を生起し、その曼荼羅も「外・内37尊」が同時に生起される⁽⁷⁹⁾。また、マントラのみならず本文中の文章も文脈も『K：成就法』と一致する部分が多く、増稿されている部分も少なくないが、それらの部分の多くは『K：成就法』の文章の曖昧な点を詳しく論じるといった体裁になっている。だがこの問題に関しては紙数を要するので今回は指摘に留めて稿を改めねばならない。本書は『K：成就法』が後代に与えた影響の存在を証明するものである⁽⁸⁰⁾。

5. 結論

以上ルーイー、ダーリカ、ガンター、クリシュナの曼荼羅観想法の各自の個性を、彼らの観想法の概観と共にいくつか個別に論じた。以下ではルーイー以降の伝承過程で見られる全体的な思想展開を簡潔にまとめて結論とする。

ルーイーは当時の理論的枠組みの中にあつて「外の曼荼羅」を37尊、「内の曼荼羅」を24尊とした。だが「外の曼荼羅」ではなく「内の曼荼羅」の観想の際に初めてピータなどと十地の関係を明示することからも理解できるように、「内の曼荼羅」を重視する傾向が既に見られた。彼の弟子ダーリカに到ると「内の37尊曼荼羅」の構想が打ち立てられる⁽⁸¹⁾。この構想は彼以降、様々な流派に基本構想として継承されていった。だが彼によって同時に「外の曼荼羅」の軽視の傾向が始まった。彼の弟子ガンターに到ると「内の37尊曼荼羅」のより一層の詳細が規定されると同時に「外の曼荼羅」の軽視が徹底された。「内の曼荼羅」主義に立つ彼は灌頂儀礼の際にも「外の曼荼羅」と同様に身体外に実体化される色粉曼荼羅などを退けたことが既に指摘されている⁽⁸²⁾。ルーイーからガンターへの生起次第再構築の歴史はく「内の37尊曼荼羅」の構想の完成と「内の曼荼羅」重視の徹底化>とまとめることができる。

だが、クリシュナはルーイー以降伝承された生起次第の構成に様々な意味付けをしてその構造を整理し、そして「内の37尊曼荼羅」の構想を継承すると共に、更に「外の37尊曼荼羅」を復活させ、「外・内の37尊」の同時生起を観想の方法として提唱した。これはガンターによる徹底した「内の曼荼羅」主義に対する再構築の試みであつた。彼は灌頂儀礼の際にも色粉曼荼羅の使用を復活させている⁽⁸³⁾。すなわち生起次第に関して、ガンターはサンヴァラ系密教に特徴的な身体曼荼羅たる「内の曼荼羅」の思想を強調し、対してクリシュナは（「内の曼荼羅」重視を継承しつつ）サンヴァラ密教のもう1つの特徴的な思想である「外・内の対応」を再明示化したと言える。そして彼の『K：成就法』は Kalākapāda が *Vajraḍākatantra* を略出した成就法を作成する際にも大いに影響を与える。

だが注意すべきは、生起次第における「外の37尊曼荼羅」と「内の37尊曼荼羅」の対応は、クリシュナ以外にも、ルーイーの『現観』の注釈者たち（Dīpaṃkaraśrījñāna, Prajñārakṣita, プトゥン）によってもなされた。彼らは「内の37尊曼荼羅」の構想を受けて、『現観』を（ルーイーの意図に反して）「外の37尊」「内の37尊」の観想を説くものとして再構築した。すなわちルーイー流37尊生起次第の基本儀軌『現観』⁽⁸⁴⁾は「外の37尊」「内の37尊」の観想法として受容・伝承された。その観想法は時に「四瑜伽」の体系で説明された。

結果的に、ルーイー流37尊生起次第は（時に「四瑜伽」の体系による）「外の37尊」「内の37尊」の観想法として、クリシュナ流37尊生起次第は「三三摩地」の体系による「外・内の37尊」の観想法として受容された。ガンター流37尊生起次第は、プトゥンの『身体曼荼羅現観』を見る限り、その始祖の徹底した「内の曼荼羅」主義は維持され得たと言える。

以上、今回は生起次第に即して各流派の思想を検討したが、生起次第に対する究竟次第の研究がこれに続くべきである。これについては稿を改めねばならない。

注

- (1) 14世紀のチベットの大学匠プトゥンに伝えられたサンヴァラ関係の相承系譜を見れば明らかである。
Lūyīpāda 流・Ghaṇṭāpāda 流・Kṛṣṇācārya 流・Kaṃbalapāda 流・Atīśa 流・Advayavajra

流などの系譜が掲載されている。本稿が扱う37尊曼荼羅を伝承しかつ始祖がサンヴァラ密教の中でも古く、諸流派全体の根源的な流派にもなっているのは初めの三流派である。この相承系譜はプトゥン著 *bLa ma dam pa rnams kyis rjes su bzu'n baḥi tshul bkaḥ drin rjes su dran bar byed pa* (以下『プトゥン聴聞録』) に記されている。なおこの問題については [桜井：1996] も参照せよ。

- (2) 各流派に属する行者たちが聖典として崇めるのは經典であろう。サンヴァラ系の經典を信奉していることにより、各流派の行者たちは流派を超えてサンヴァラの信徒としての包括的なアイデンティティを確立していたと思われる。だが、各流派に一流派としての狭義のアイデンティティを確立させ、また行者たちの実際の実践の場において力を持っていたのは儀軌——それは經典の權威を背後に持ち、各流派の思想的独自性の下にいくつかの經典を(彼らにとっては)正統的に再構築したものであり、かつ行者の実践の場に即利用できるようにマニュアル化されている——であったと思われる。
- (3) だが *Ghaṇṭāpāda* の灌頂論を扱った [桜井：1996] をこのアプローチの先行研究として挙げ得る。
- (4) 周知の通りサンヴァラ曼荼羅は五つの輪(大楽輪・心輪・語輪・身輪・三昧耶輪)からなるが、それらのうち大楽輪の中心に坐するヘールカとヴァーラーヒー、および心・語・身の三輪の勇者と瑜伽女は合体尊になっている。本稿ではそのような合体尊を1体と数え、合計37尊と数える。また、本稿において特に断りなく「37尊」とする場合は上記の五輪全ての神々を指し、「24尊」とする場合は心・語・身の三輪の24尊を指し、「13尊」とする場合は大楽輪と三昧耶輪の13尊を指し、「5尊」とする場合は大楽輪の5尊を指し、「1尊」とする場合は曼荼羅の主尊ヘールカとその妃ヴァーラーヒーの合体尊を指すことにする。
- (5) 以下参照するプトゥンの著作によれば、各成就法は生起次第と究竟次第から成る。だが、各成就法自体には生起次第・究竟次第という明確な項目分けが行われていない。しかし、確かに各成就法中プトゥンが究竟次第に項目分けする箇所は、各成就者の手による究竟次第の書に説かれている内容を極簡潔にまとめた記述になっている。各成就者の究竟次第については稿を改める予定である。
- (6) 彼(*Jālandharapāda*)に帰せられる成就法として *Vajrayoginīsādhana* (Toh. No.1570./ Ota. No. 2278.)がある。だがこれはヴァーラーヒー関係の成就法であり、本稿が扱う37尊曼荼羅とは趣旨が違う。さらにこの書がクリシュナの師 *Jālandharapāda* と同一人物なのかという問題もある。ガンターとクリシュナの間にいる彼の思想は本稿の試みに資するところが多いのだが、今回は上記の理由により彼に帰されるこの成就法を有効に活用できなかった。
- (7) 『プトゥン聴聞録』, 35b4–35b6。
- (8) *dPal ḥkhor lo sdom paḥi lus kyi dkyil ḥkhor gyi mñon par rtogs pa*, 16a5–16b1。
- (9) 筆者が手に入れたその複写は2aと2bが何等かの理由で抜けており、また3aの前半部分(チベット訳に従えば2種の積集のうち福德の積集が説かれているべき箇所)には OM AḤ HŪM 3文字の解説が説かれており、チベット訳と一致しない。また、Skt. Ms. のコロホーンには、< *Cakrasamvara ḥ śriherukābhisamayaḥ śamāptaḥ // // kṛtir ācāryaLūyīpādānām iti* // > (以上, Transcript) と書かれているのに対して、チベット訳はその梵文題名を *Śrī bha ga va ti a bhi sa ma ya* (Transcript) としており、*abhisamaya* の部分以外一致しない。だが、(上述の一部を除いた)本文全体はチベット訳と非常によく一致している。以上の理由から、本稿では『現観』のサンスクリット・チベット両方の文献を使用する。
- (10) なお、『現観分別』『具四瑜伽』はこの「マハーヨーガ」を究竟次第と結び付ける。
- (11) 他に *Tathāgatavajra* の注釈が存在するが、今回は参照し得なかった。
- (12) これらのうち「蘊處界の浄化」は、蘊・處・界を以下の神々として浄化する。

色：	毘盧遮那	眼：	愚妄金剛	地：	パータニー
受：	金剛日	耳：	憎悪金剛	水：	マーラニー
想：	蓮華舞自在	鼻：	貪妬金剛	火：	アーカルシャニー
行：	金剛王	口：	愛欲金剛	風：	パドマヌリテーシュヴァリー
識：	金剛サッタ	触：	嫉妬金剛	空：	パドマジュヴァーリニー
一切如來性：	ヘールカ	一切處：	自在金剛		

これら各神々の種字とそれが布置される箇所は、『具四瑜伽』(2b7-4a2)によれば、

色：頭に HŪM 字→毘盧遮那
 想：喉に HRĪḤ 字→無量光
 識：心臓に HŪM 字→金剛サッタ
 眼：眼に OM 字→愚妄金剛
 鼻：鼻に TRAM 字→貪妬金剛
 身体：身体に KHAM 字→嫉妬金剛
 地：臍に LAM 字→パータニー
 火：喉に PAM 字→アーカルシャニー
 空：秘処に KHAM 字→パドマジュヴァーリニー

受：臍に AM 字→金剛日
 行：足のくるぶしに HO 字→金剛王
 五蘊の真如：頭頂に HI →吉祥ヘールカ
 耳：耳に HŪM 字→憎悪金剛
 舌：舌に A 字→愛欲金剛
 心：心臓に HAM 字→自在金剛
 水：心臓に MAM 字→マーラニー
 風：額に TĀM 字→パドマヌリテーシュヴァリー

であるという。

- (13) そのマントラは, om svabhāvaśuddhaḥ sarvadharmāḥ svabhāvaśuddho 'haṃ
- (14) そのマントラは, om śūnyatājñānavajrasvabhāvātmako 'haṃ
- (15) 金剛サッタとは普賢菩薩の密教的姿であり、いわゆる『真実撰経』で明確化されたく法身マハーヴァイローチャナ=普賢菩薩>と同一の性質のものであると筆者は考える。もしこの金剛サッタを、多数存在する密教の菩薩たちの中の1菩薩と考えると、ここでそのような金剛サッタのシンボルを登場させる理由が見当たらない。この HŪM を基に以下曼荼羅が展開していくのだから、やはりこの金剛サッタは法身金剛サッタであると考えられる。
- (16) 『具四瑜伽』(7a7-8a1) はこれを(母タントラ流の)五相現等覺 (*mñon par byañ chub rnam pa l ña*) のうちの四つとする。すなわち、; 雑色8葉蓮華の上に16のアーリを左右両回りに置いて32相の自性を生じて白色の月輪を生じ(大円鏡智・1)、その上に34カーリと *ḍa ḍha da dha ya la* の6つを加えた40を左右両回りに置いて80種好の自性を生じて赤色の月輪を生じ(平等性智・2)(以上を「ヨーガ」とする)、それら二つの中心にナード点を溶け込ませ、ナード点→空点→莊嚴点→ M → H → Ū (ここで HŪM 字が完成する)→原因としての持金剛の自性の光明を放ち(妙觀察智・3)、その五色光明から五輪の神々を無限に拡散して、一切有情の罪を浄化し五輪の神々にしてから、再び摂し、十方の無始成就の一切の勇者と瑜伽女を引き寄せて、方便般若入平等の菩提心に溶け込ませ、全てを HŪM のナードに溶け込ませる(成所作智・4)(以上を「アヌヨーガ」とする)。『現観釈』は各智慧の名称は述べないが、これと同様の観想プロセスを述べる(Toh. 38a4-38b1./ Ota. 47b2-47b8)。
- (17) だが、ここではそれらの巡礼地は十地と結び付けられていない。
- (18) Ms; *saptatṛiśad bodhipākṣikā dharma devatāyogena*. なお, *devatāyoga* なる語について、サンヴァラ関係の文献のチベット訳としては *lhaḥi sbyor ba*, *lhaś sbyor ba*, *lha dañ sbyor ba* の3通りの訳し方(第一のものが最も多い)が存在する。筆者はこの語を「神の瑜伽」の意に取る。
- (19) この修習の目的として、『現観』自体は何も述べず、『現観分別』は「吉祥なるヘールカの神々は法身の自性にあると説示することと、彼(ら神々)に対する愛着を退けることと、マヤーと空は無二であると示すこと(Toh. 192a6/ Ota. 192b3)」と述べ、『現観釈』は「(外の曼荼羅の)神々への執着を捨てるために、そして一切知の獲得の説示であるために(Toh. 40a4/ Ota. 49b8-50a1)」と述べ、

『具四瑜伽』は「以上のように（外の曼荼羅の観想によって）神を明瞭に観想してから、その神もまた法身の自性にあると知るために、37菩提分法としての神との瑜伽によって清浄さを観想する（12b4-12b5）」と述べる。なお、この修習を法身に結び付ける解釈は（後に明らかにするが）ダーリカによってなされたものである。

- (20) 『現観分別』『現観釈』『具四瑜伽』は「内の曼荼羅」を24尊ではなく37尊とする。後に明らかにするが、この「内の37尊曼荼羅」の構想はルーイーの弟子であるダーリカの著作に初出するものであって『現観』には根拠がない。以下、特に13尊の脈官等についての上記3書（順々に Toh. 197a1-197a3/ Ota. 197b4-197b7, Toh. 41a6-41b1/ Ota. 51a6-51a8, 14a3-14a5および15a4-15a7）の意見をまとめる。なお、以下『現観分別』『現観釈』が述べる身体の諸部位はおそらく脈官が依止する箇所なのだろうが、それがつながる先および種字を明示していない。

	『現観分別』	『現観釈』	『具四瑜伽』
ヘールカ	頭頂	(明示せず)	HŪM
ヴァーラーヒー	秘密の蓮華	(明示せず)	アヴァドゥーティー
ダーキニー	心臓	心臓	心臓の東の葉を通して水を運ぶ脈官：MĀM
ラーマー	喉	喉	心臓の北の葉を通して風を運ぶ脈官：TĀM
カンダローハー	臍	臍	心臓の西の葉を通して火を運ぶ脈官：VĀM
ルーピニー	額	額	心臓の南の葉を通して地を運ぶ脈官：LĀM
カーカースヤー	口	口	心臓の東の葉を通して臍と口につながる脈官
ウルカーサヤー	右鼻	左鼻	心臓の北の葉を通して左鼻につながる脈官
シュヴァーナースヤー	肛門	肛門	心臓の西の葉を通して肛門につながる脈官
シュウカラースヤー	左鼻	右鼻	心臓の南の葉を通して右鼻につながる脈官
ヤマダーヒー	左耳	右耳	心臓の南東の葉を通して右耳につながる脈官
ヤマドゥーティー	右耳	左耳	心臓の南西の葉を通して左耳につながる脈官
ヤマダムシュトリ	右眼	右眼	心臓の北西の葉を通して右眼につながる脈官
ヤママトニー	左眼	左眼	心臓の北東の葉を通して左眼につながる脈官

ところでルーイー著の5尊成就法として Śrīvajrasattvasādhana がある。この書は「それら（諸々の装飾）によって清浄なるヘールカの四面において、」に続いて以下の対応を述べる（Toh. 2b7-3a2/ Ota. 3a7-3b2）。

ヘールカの顔1	<i>sukha</i>	空	大印	ララナー	ダーキニー
ヘールカの顔2	<i>susukha</i>	無相	三昧耶印	ラサナー	ラーマー
ヘールカの顔3	<i>visukha</i>	無願	法印	アヴァドゥーティー	カンダローハー
ヘールカの顔4	<i>mahāsukha</i>	自性光明	羯磨印	<i>dam rgya na</i>	ルーピニー

これを見るとララナー・ラサナー・アヴァドゥーティー・*dam rgya na* が4瑜伽女の脈官であるかのようなが、文脈上この対応はあくまでヘールカの観想の際にその四面が何を象徴するかを述べたものであり、「内の曼荼羅」ではないと本稿では考えている。

- (21) 『現観分別』『具四瑜伽』は、それら勇者と瑜伽女が「内のピータなど」において合体しているものとして観想する旨を述べる。『現観釈』はこの問題に関しては、『現観』の文章通りにただ単に逐語的に注釈するのみであり、「内のピータなど」における勇者と瑜伽女の結合の姿を述べてはいない。なお、ダーリカ以下のサンヴァラの成就者たちは「内のピータなど」の下に勇者と瑜伽女を同時に述べており、彼らを「内のピータなど」における合体尊として観想する旨を暗に述べている。
- (22) そのマントラは om āḥ hūṃ / om sarvavīrayoginīṃ kāyavākcittavajrasvabhāvātmaḥ haṃ / om vajrasuddho dharmavajrasuddho haṃ

- (23) 「2種」とは勇者と瑜伽女のことである。これは「(勇者と瑜伽女の) 6種」(勇者と瑜伽女それぞれの甲冑のマントラが六つずつあるから) と呼ばれる場合もしばしばある。本稿は「2種の甲冑」で統一する。なお、このマントラは *Samvarodayatantra* chap.13, 35-38. に説かれているものと同内容である。
- (24) ここでは勇者・瑜伽女たちの一連のマントラが記されている。それらの念誦を『具四瑜伽』は「念誦供養」と呼ぶ。
- (25) そのマントラは om sarvavatathāgatābhidsekasamayaśriye hūṃ. 各注釈書によれば、呼び出した灌頂の神々から智慧の甘露を受けた後に、それら神々を観想した曼荼羅(自分自身・ヴァーラーヒー・5輪)にそれぞれ溶け込ませて五族の主として加持する旨を述べる。だが特に『具四瑜伽』は智慧の甘露を浴びる観想を「瓶灌頂」に暗に相当させ、続いて灌頂の神々の中心であるヘルカとヴァーラーヒーの性瑜伽により生じた菩提心によって「秘密灌頂」を得て、次にそのヴァーラーヒーをムドラーとしてヘルカから受け取り「般若智慧灌頂」を、続いて第四灌頂を受けてから、最後に五族の主としての加持を行う旨を述べている(16b3-17b2)。
- (26) 『現観釈』によれば、これは女神の一連のマントラであるという。ヴァーラーヒーを含めた全ての瑜伽女のマントラのことか？
- (27) Tib. は「勇者」とする。
- (28) om hrīḥ ha ha hūṃ hūṃ phaṭ
- (29) om sarvabuddhaḍḍākinīye vajravarṇaṇīye hūṃ hūṃ phaṭ svāhā
- (30) om vajravairocanaṇīye hūṃ hūṃ phaṭ svāhā
- (31) Toh. 200b1/ Ota. 225b7.
- (32) この推定サンスクリット語はクリシュナ著 *Vasantatilaka* の Skt. Ms. に依った。なお、同書は四元素を単に列挙する時には *vāyu* を用いている。この *māruta* には「生气」のニュアンスが強調されていると考えられる。
- (33) チベット訳『D: 成就法』では「五元素」と「甘露」となっているが、これはおそらくサンスクリット原本の *bhūta, pañca, amṛta* の関係において、チベット語翻訳者が *pañca* を *amṛta* にかけるべきところを *bhūta* に誤ってかけて翻訳したためであり、本当は「(四) 元素と五甘露」ではないかと考えられる。なぜなら本書において、「外の曼荼羅」における大乗輪の四維の瓶 (*bum pa*) に関する記述で、それを満たす五甘露が説明されているからである。だが、本書のサンスクリット原本の現存が確認できない今、断定的なことは言えない。
- (34) この推定サンスクリット語は注(32)と同じ理由による。
- (35) Toh. 201a5-201a6/ Ota. 226b8-227a1. だが、その八つの門が身体の中のどの穴なのかは明示されていない。また、彼女たちの種字は本書では述べられていない。
- (36) 勇者と瑜伽女が「内のピータなど」の名称の下に同時に説明されているので、筆者はこのように解釈した。
- (37) 「智慧曼荼羅」としたが、『D: 成就法』では単に「十方世界にいる勇者と瑜伽女たち」と書かれている。
- (38) 『現観』では、この「37菩提分法神瑜伽」は「外の曼荼羅」の生起の直後に行われたが、ここでは「外の曼荼羅」に続く「内の曼荼羅」の生起の後に行われる。この理由としては、『現観』では「外の37尊曼荼羅」と「37菩提分法」が数の上で対応するからであり(「内の24尊曼荼羅」では対応しない)、『D: 成就法』では「内の37尊曼荼羅」と数の上で対応するからである(「外の13尊曼荼羅」では対応しない)と考えられる。
- (39) これについては[津田: 1972][同: 1974]を参照した。
- (40) 『現観』に関するこれら3書の再構築のやり方は、本稿中『現観』の内容を扱った箇所の諸注記を参

照せよ。

- (41) だが、それらを三身に結び付ける理由は同書に説明されていない。各修習を三身に結び付けることは、プトゥンのサンヴァラ理解に影響を与え、また特に「37菩提分法」を法身に結び付けることは、『現観分別』が『現観』を再構築する際にも同意していることは既に述べた通りである。
- (42) Toh. 202b5-202b6/ Ota. 228b4-228b5.
- (43) 『身体曼荼羅現観』は「以上のように生じた神に対する愛著を捨てて一切神を法身の自性と知るために、仏の法身の菩提分と一致する37の法は自分が観想した37の神であり、自分が観想した37の神もまた仏の法身の菩提分と一致する37の法の自性を持つ、と信解して、明瞭に完成した一切神を鏡の映像の如くに見よ」説明する (7b1-7b3)。
- (44) 『Gh:成就法』はここで単に「自分の身体」とするのみであり、「三昧耶曼荼羅」としたのは筆者による。
- (45) *snod*. カパーラのことか？
- (46) Toh. 223a5-223a7/ Ota. 258b7-258b8.
- (47) Toh. 227a4-227a6/ Ota. 263b3-263b5.
- (48) 『身体曼荼羅現観』は MĀM LĀM PĀM TĀM とする。
- (49) Toh. 356a4-356a5/ Ota. 390b6-390b7.
- (50) 『K:成就法註』の中で、プトゥンは『K:成就法』を三三摩地にうまく区分するためにサンヴァラ関係以外のものも含めた様々な流派の三三摩地の区分法を挙げ、検討している (49b7-50a5)。
- (51) 『K:成就法註』によれば、空の状態から自分の心がナード点 (*nāda*) として出現し、それが放つ光明によって護輪、根本の生起をするという。
- (52) 『K:成就法註』によれば、母タントラ流の五相現等覚によって「因の持金剛」を生起するという。五相現等覚については注(16)を参照せよ。なお『K:成就法註』は、ここで「因の持金剛」の合体尊の生起を第五番目の(極清浄)法界智としている。
- (53) 『K:成就法註』によれば彼女は四面二臂。
- (54) 『K:成就法註』によれば、ここで「原因としての持金剛」は四歓喜を体験しつつ男根から妃の子宮の中に精液の姿の菩提心を放出して、妃の子宮の中にある HŪM (これはルーイーなどの、子宮としての蓮華にある金剛サッタ相の HŪM を思い起こさせる) と混ざって「結果としての持金剛」の如きヘルカを主とする所依能依具有の曼荼羅を子宮の中に生じるという。
- (55) そのマントラは、Toh. では om mahāsukhavajrasattva jaḥ hūm vaṃ hoḥ suratas tvam dr̥śya hoḥ であるが、Ota. では om mahāherukavajra svāhā jaḥ ・ ・ (後は Toh. と同じ) ・ ・ ・ とする。『K:成就法註』では Toh. の方を支持している。
- (56) 『K:成就法註』によれば、口から入れるという。
- (57) *Samvarodayatantra*, chap.2. 14-20.
- (58) Ota. では ĀḤ としている。『K:成就法註』は AM を支持している。また、クリシュナによる究竟次第の書 *Vasantatilaka* によれば、HŪM と AM は彼の究竟次第の体系で重要な役割を持っている。ここは AM が正しいように思われる。
- (59) その際のマントラは om dharmadhātusvabhāvātmaṃ 'haṃ である。
- (60) om hrīḥ ha ha hūm hūm phaṭ : なおこのマントラは時に「7字のマントラ」と呼ばれる。なお「ウパフリダヤマントラ」としたのは、『現観』の Skt. Ms. が *ñe baḥi sñiṇ po* とチベット語に訳されている箇所を *upahṛdaya* としていることに依った。
- (61) om śrīvajra-he-he-ru-ru-kaṃ hūm hūm phaṭ ḍākinījālasaṃvaraṃ svāhā : なおこのマントラは時に「22字のマントラ」と呼ばれる。
- (62) 『K:成就法註』によれば、それぞれ黒色のアシュク、赤色の無量光、白色の毘盧遮那であるという。

- (63) om sarvabuddhaḍākiṇīye vajravārṇanīye hūṃ hūṃ phaṭ svāhā :これをヴァーラーヒーのフリダヤマントラとするのはクリシュナ流の特徴の1つである。ルーイー・ダーリカ・ガンターはこれをウパフリダヤマントラとする。
- (64) om vairocānīye hūṃ hūṃ phaṭ svāhā :ルーイー・ダーリカ・ガンターはこれをフリダヤマントラとする。
- (65) 『K:成就法註』によれば、それぞれ黒色の心金剛、赤色の語金剛、白色の身金剛であるという。
- (66) 『K:成就法註』によれば、それぞれ白色の如来族の自性、青色の金剛族の自性、赤色の蓮華族の自性、黄色の宝族の自性、緑色の羯磨族の自性であるという。
- (67) 『K:成就法註』によれば、諸々の前行は資糧道、ナーダとして子宮に入るまでは加行道、子宮の中で果の持金剛として形を整えて身語心加持をするまで(=セーヴァーからサーダナまで)の子宮の中にいる状態は十地であり、智慧引入によって子宮から生まれて識が完成して仏たちと等しくなり、灌頂によって三界の王となり、清浄な衆による供養によって歓喜するという。(49b1-48b5の取意)
- (68) 『K:成就法註』によれば、子宮内で種子としての37尊の曼荼羅を觀想し、続く子宮からの出生に際し、それらの種子を勇者や瑜伽女の姿形に変化させるという。
- (69) Toh. 276a3-276a6./ Ota. 326a5-326a8.
- (70) Ms. 7b2-7b5, Toh. 301b1-301b3./ Ota. 375b3-375b4.
- (71) Ms. 6b5-7b7./ Toh. 301a3-301b3./ Ota. 375a3-375b4. なお、Ms. と Toh. は(全くではないが)ほぼ一致するのに対して、Ota. はところどころ不一致と欠文がある。本稿の読みは Ms. によった。
- (72) 『K:成就法註』によれば、13尊の脈官や種子はガンターの規定したものと同じであるという。また同書は、この「外・内の37尊曼荼羅」の修習を応身・報身の儀軌と規定する。これはダーリカの解釈法に基づいたものであると考えられる。
- (73) 『K:成就法註』はこれを法身の儀軌とし、以上を以て最勝曼荼羅王三摩地とする。その後、持金剛の勧請により曼荼羅の神々を虚空界に拡散して利他行をなし、再び撰する最勝羯磨王三摩地の修習を説くが、『K:成就法』自体には根拠がない。
- (74) この受胎論は *Samvarodayatantra* chap.2. 14-20. はもちろん、*Guhyasamājantra* 系の文献にも既に見られる。詳しくは[田中:1994]を参照せよ。
- (75) 「三三摩地」「四支」による意味付けが意味するものは何かについてここで明らかにすべきだが、既に述べたように『K:成就法』にはその区分が明確に記されていないので今回はなしえなかった。なお、クリシュナのこのような試みは彼の究竟次第の書 *Ālīcatuṣṭaya* (およびその自註)にも明白である。本書の中でクリシュナは密教の伝統的な多くの様々な諸概念 (EVAṂ MA YĀ・四印・般若と方便・四輪・四瑜伽・三三摩地・三羯磨・四支・四聖諦・四部派・四別・四刹那・四歡喜・四果・四賢・四座・四眞実・三曼荼羅・二般若・三身・五如来・五蘊・五智・四明妃・四元素・六菩薩・六根・ガティーとダンダとサンクランティとヤーマ・十波羅蜜多・十地・十のピータなど、が挙げられている)を彼の究竟次第の体系の中に当てはめて整理する試みをしている。
- (76) Skt. Ms. 1b6-2a3./ Toh. 298b6-298b7./ Ota. 372a2-372a4.
- (77) Skt. Ms. 5a3-5a4./ Toh. 300a7./ Ota. 374a3-374a4.
- (78) Skt. Ms. 1b5-1b6./ Toh. 298b5./ Ota. 372a1-372a2.
- (79) 本書は三昧耶輪の8人の瑜伽女の種子を(順に)4つの無性別文字・ŚA・ṢA・SA・HA とする。これは『Gh:成就法』で明示された種子とは一致しない。
- (80) 本書が『K:成就法』と大きく異なる点は、初瑜伽三摩地において主尊のみならずそれを囲む4人の瑜伽女(パターニー・マーラニー・アーカルシャニー・ヌリテーシュヴァリー)をもその際に觀想することである。なお『K:成就法』の4人の瑜伽女はダーキニー・ラーマー・カンダローハー・ルーピーニーである。ちなみに双方の4瑜伽女とも四元素を象徴する女神である。また、本書の大きな特徴の

1つとして、『K：成就法』について本稿が挙げた表中「脈官輪の教示など」とした箇所までを「最勝曼荼羅王三摩地」としている。『K：成就法』の該当箇所を「究竟次第」とするブトゥンの見解を受け入れるならば、Kalākapaḍa は生起・究竟次第をまとめて「三三摩地」の体系で説明するユニークさを持つ。

- (81) だが *Laghusaṃvaratantra* chap. 41. には「ピータなど」の説明として、ラーマーを *Sindhu* (= 足の甲) に、カンダローハーを *Triśakunī* (= 臍) に結び付ける記述が見られる。ダーキニーとルービニーは説明されない。これも13尊の「内の曼荼羅」化の1つの試みと考え得るが、これとダーリカの「内の曼荼羅」論との関係は現在明確にできていない。だが、ラーマーを足の甲に結び付けることや、4 瑜伽女の依止する部位を24尊のそれと同名にするとといった点はダーリカの構想とは一致しない。ガンターやクリシュナの「内の曼荼羅」論は確かにダーリカのその延長上にある点を考えれば、サンヴァラ密教史上においてダーリカの果たした役割はあなどれないと言える。
- (82) 色粉曼荼羅などに対するガンターの態度は、[桜井：1996] を参照した。
- (83) クリシュナの灌頂儀軌である *Bhagavacchricakraṣaṃvaramaṇḍalavidhi* には扱地・作壇法から曼荼羅の墨打ち・37尊の尊容に到るまで述べられている (Toh. 277b5-284a7/ Ota. No.2163. 328a1-335a6, No.2164. 345a7-352b5)。
- (84) ルーイー流生起次第の基本儀軌としては『D：成就法』よりも『現観』が重視されたようである。(本稿で扱ったものも含めて) 現存する注釈書は『現観』に関するものばかりである。だが『D：成就法』の影響力は、その「内の37尊曼荼羅」の基本構想がルーイー流の中においても外においても継承されている点を考える時、決して小さいものではなかったことが理解できる。

<略号・使用文献>

Skt. Ms./ Ms.	サンスクリット写本	
Toh.	チベット大蔵経デルゲ版 (東北目録)	
Ota.	チベット大蔵経北京版 (大谷目録)	
<i>Samvarodayatantra</i>	Skt. Text. S. Tsuda : <i>The Samvarodayatantra Selected Chapters</i> , Hokuseido Press, 1974.	
<i>Laghusaṃvaratantra</i>	<i>Tantrarājaśrīlaghusaṃvara</i> ,	Toh. No.368./Ota. No.16.
<i>Hevajratantra</i>	Skt. Text. D. Snellgrove : <i>THE HEVAJRA TANTRA</i> , Oxford University Press, London, 1959.	
Lūyīpāda (ルーイー) ;	<i>Cakrasaṃvaraśrīherukābhisamaya</i> (『現観』),	
	Skt. Ms. Moriguchi 目録 No.608./ Toh. No.1427./ Ota. No.2144.	
	<i>Śrīvajrasattvaśādhana</i> ,	Toh. No.1454./Ota. No.2171.
Dārikapāda (ダーリカ) ;	<i>Śrīcakrasaṃvarasādhanaṭattvasaṃgraha</i> (『D：成就法』),	Toh. No.1429./Ota. No.2145.
	<i>Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhitattvāvātāra</i> ,	Toh. No.1430./Ota. No.2140.
Ghaṇṭāpāda (ガンター) ;	<i>Śrīcakrasaṃvarasādhana</i> (『Gh：成就法』),	Toh. No.1432./Ota. No.2149.
	<i>Upadeśakāyaṃḍalābhisamaya</i> , Toh. No.1434./Ota. No.2151.	
Kṛṣṇācārya (クリシュナ) ;	<i>Śrīcakrasaṃvarasādhana</i> (『K：成就法』),	Toh. No.1445./Ota. No.2162.
	<i>Ālicatuṣṭaya</i> ,	Toh. No.1451./Ota. No.2168.
	<i>Ālicatuṣṭayavibhaṅga</i> ,	Toh. No.1452./Ota. No.2169.

- Bhagavacchrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi*, Toh. No.1446./Ota. No.2163, Ota. No.2164.
Vasantatilaka, Skt. Ms. Matsunami 目録 No.354./Toh. No.1448./Ota. No.2166.
 Kalākapāda ;
Śrīvajraḍākanāmamahātantrarājoddhṛtasāadhanopāyikābodhicittāvalokamālā,
 Toh. No.1503./Ota. No.2218.
 Dīpaṃkaraśrījñāna ;
Abhisamayavibhaṅga (『現觀分別』), Toh. No.1490./Ota. No.2205.
 Prajñārakṣita ;
Śryabhisamayapañjikā (『現觀釈』), Toh. No.1465./Ota. No.2182.
 Bu ston rin chen grub (ブトゥン) ;
dPal ḥkhor lo sdom paḥi sgrub thabs rnal ḥbyor bshi ldan (『具四瑜伽』),
 Śatapiṭaka series vol.47, 1-48.
dPal ḥkhor lo sdom paḥi luś kyī dkyil ḥkhor gyi mñon par rtogs pa (『身体曼荼羅現觀』),
 Śatapiṭaka series vol.47, 353-384.
dPal ḥkhor lo sdom paḥi sgrub thabs kyī ḥgrel pa ḥkhrul pa spoñ bar byed pa (『K:成就法
 註』), Śatapiṭaka series vol.47, 179-338.
Bla ma dam pa rnams kyis rjes su bzuñ baḥi tshul bkaḥ drin rjes su dran bar byed pa (『ブト
 ウン聴聞録』), Śatapiṭaka series vol.66, 1-142.

<参考文献>

- 桜井宗信 1996 「サンヴァラ系密教に於ける灌頂儀礼の一形態 — Ghaṭṭapāda 所説の<身体曼荼羅
 灌頂>」『インド密教儀礼研究 — 後期インド密教の灌頂次第 —』, 法蔵館, 297-
 314. (初出『日本西藏学会会報』39, 1993.)
 田中公明 1994 「密教における受胎と胎児論の歴史的展開 — 『時輪タントラ』の内品を中心にして —
 」『超密教時輪タントラ』, 東方出版, 105-121.
 津田真一 1971 「ḍākinijālaśaṃvara の原像」『印度学仏教学研究』20 (1), 430-436.
 1972 「サンヴァラ系密教に於ける piṭha 説の研究 (I)」『豊山学報』16, (26) - (48)
 1974 「(同) (II)」『豊山学報』17.18合併号, (11) - (35).
 1987 「タントリズム瞥見 — サンヴァラの儀礼と教義」『反密教学』, リプロポート, 133-152.
 (初出『牧神』7, 1976.)
 1981 「密教における真理の領域」『勝又俊教博士古稀記念論集 大乘仏教から密教へ』, 春秋社,
 317-339.
 羽田野伯猷 1987 「Tāntric Buddhism における人間存在」『チベット・インド学集成 第三巻 インド篇
 I』, 法蔵館, 50-165. (初出『東北大学文学部研究年報』9, 1958.)

* 本稿の責任は全て筆者にあることは言うまでもないが, National Archives 所蔵のサンスクリット写
 本の複写の入手に際して, 森口光俊先生および前田崇先生の多大な御助力を賜りました。最後になりまし
 たが, 先生方の深い恩恵に対して厚く御礼申し上げます。

The Process of Origination in Saṃvara Schools

Tsunehiko SUGIKI

This paper aims to clarify the history of reconstructions of the “process of origination” (*utpattikrama*) by Lūyīpāda, the founder of the Lūyīpāda school, and his successors.

Saṃvara Tantric Buddhism insists that the 24 holy places in India (*outer pīṭha*) correspond to 24 sacred abodes of 24 principle veins in one’s body (*inner pīṭha*). These are symbolized as 24 outer and 24 inner deities, the former being combined with the 13 deities of the original Saṃvara *maṇḍala* to form an outer *maṇḍala* of 37 deities. Lūyīpāda advocates meditation on both the outer *maṇḍala* of 37 deities and the inner *maṇḍala* of 24 deities. He adds that secret truth is revealed in the origination of the inner *maṇḍala* of 24 deities, which correspond to 24 of the deities in the 37-deity outer *maṇḍala*.

Dārikapāda, the direct successor of Lūyīpāda, expounds the basic concept of the inner *maṇḍala* of 37 deities. He develops the theory of Tantric anatomy and exerts a great influence on his successors, who include the commentators on Lūyīpāda’s original text. At the same time, however, Dārikapāda displays a tendency to treat the outer *maṇḍala* lightly. This trend develops further under his direct disciple Ghaṇṭāpāda, the founder of the Ghaṇṭāpāda school. “*Inner maṇḍala-ism*” has become the basic stance of this school. His reconstruction emphasizes the sacredness of one’s body, a major aspect of Saṃvara teaching.

Kṛṣṇācārya, one of his indirect disciples and the founder of his own school, not only inherits the idea of an *inner maṇḍala* of 37 deities, but also revives that of an outer *maṇḍala* of 37 deities, and gives several meanings (*trisamādhī*, the theory of human conception, and so on) to the whole structure of the “process of origination.” His reconstruction is characterized as the re-specification of the correspondence between the outer and the inner, another central Saṃvara teaching.

As a result, Ghaṇṭāpāda’s school adheres to “*inner maṇḍala-ism*,” while the schools of both Lūyīpāda and Kṛṣṇācārya emphasize a correspondence between the 37 outer and inner deities.